

何晏の詩について

著者	鈴木 修次
著者別名	SUZUKI Syuji
雑誌名	漢文學會々報
巻	27
ページ	1-12
発行年	1968-06-15
URL	http://doi.org/10.15068/00149091

何晏の詩について

鈴木修次

魏の何晏（一九〇—二四九）、字は平叔は、王弼（二二六—二四九）とともに清談の祖と仰がれ、道徳論（現存せず）や論語集解の著があることによつて知られている人であるが、詩人としての何晏も、文學史的に見のがすべからざる位置にあると考えられる。何晏の詩と稱されるものは、現在三首しか残っていないが、その詩は、建安詩とはおもむきを異にする閉塞の詩ともいふべく、いわゆる正始の詩のさきがけをなすものである。正始とは、魏の齊王芳の年號、二四〇年から二四九年までの時期であるが、建安（一九六—二三〇）に續く詩史の時代で、その詩風は應璩（一九〇—二五二）、阮籍（二一〇—二六三）、嵇康（二二三—二六二）によつて代表される。文心雕龍・明詩篇にいう、

正始に及びて道を明かにし、詩に仙心を雜ふ。何晏の徒は、率ね浮淺多し。惟だ嵇の旨は清峻、阮の旨は遙深、故に能く標はる。乃の應璩の百一の若きは、獨立して懼れず、辭は譎なれども義は貞しく、亦魏の遺直なり。

何晏は、「百一詩」あるいは「新詩」の作者として知名な應璩とほぼ同年の人と考えられるが、その二人は、阮籍・嵇康よりはだいぶ先輩にあたる。正始の詩のさきがけは、何晏・應璩にあるといつてよい。

何晏の生年を、一九〇年ごろと考えるのは、何晏の母の尹氏が曹操の夫人（妾）になつたとき、つれ子であつた何晏は七歳であつたということが世説新語の夙惠篇にされることから推定するものである。世説新語にいう、「何晏は七歳にして、明惠神の若し、魏の武これを奇愛し、晏の宮内に在るに因りて、以て子と爲さんとす。」曹操が尹氏を「夫

人」にしたのは、司空の時であつたということが、三國志卷九、曹爽傳に附載されている何晏の傳の裴松之注に引く魏略にのべられている。曹操が司空になつたのは一九六年、そのときかりに何晏が七歳であつたとするなら、生まれは一九〇年ということになる。何晏が死んだのは、曹爽が誅されたときであるから、正始十年（嘉平元年）、二四九年である。應璩は、三國志卷二一、王粲傳に附載する應璩の傳の裴松之注に引く文章敘録に、嘉平四年（二五二）に卒すとあり、三國志卷二一の方技傳、朱建平の條に、應璩は朱建平の豫言のごとく六十三歳で死んだといふので、それから逆算して一九〇年に生まれたとする推定がでる。しかるとき、何晏と應璩とは同年であつたということになる。

鍾嶸の詩品は、應璩と同じく何晏を中品に置くが、文心雕龍・明詩篇の何晏に對する評價はきびしい。文選に應璩の「百一詩」を一首收めるが、何晏の詩は收載しないごとく、後世に與えた影響という點についていふならば、いかにも何晏は應璩に及ばない。しかしながら何晏は、後に述べるごとく曹氏と閨閥關係にたつ貴族で、建安七子の一人であつた應璩の弟たる應璩とは、その社會的位置において比較にならず高い。したがつて、貴族文化全盛時代の當時にあつて、當代の貴族詩人に與えた影響は、應璩よりも何晏の方がはるかに大きかつたにちがいない。事實、何晏の殘るもの少ない詩についてみても、阮籍や嵇康の詩への投影が、後述するごとくに考えられる。何晏の詩の影響力を、低く評價することは、むしろ危険であると思う。

何晏は、後漢の靈帝の外戚であつた太傅何進（一八九）の孫、一説には何進の弟の何苗の孫である、と世説新語・言語篇注に引く魏略にいう。三國志の何晏傳にはいう、何進の孫にして、母の尹氏は太祖の夫人であつた。その爲に何晏は曹氏の宮廷に生長し、公主に尙した、と。何進は、その妹が靈帝の妃になつてゐる。何晏が尙した女性は、何晏の母の妹であつた金郷公主という人であつた、と裴松之注に引く魏末傳にいうが、裴松之も否定するごとく、それは事實ではないであらう。しかしそうしたうわさがささやかれるほど、何晏の身邊には、宮廷社會の暗い影がつきまとつていたものと思われる。曹操のもとにあつて、服飾に太子に擬するふるまいがあつたり、公主に尙しては嬌慢であつたりして、文帝・明

帝からはうとんぜられたことが、裴松之注に引く魏略や、世説新語・言語篇注に引く魏略にのべられている。魯迅の論文(註し)で有名な五石散という精神安定剤の、魏晋における初期の愛用者であつたことが、世説新語・言語篇の注に見える。正始年間、司馬懿の對抗勢力であつた侍中の曹爽にとりいり、やがて散騎侍郎・侍中尙書となつた。

曹爽は、曹操の族子たる曹眞の子であるが、明帝の臨終に際して、司馬懿と共に、當時八歳であつた太子芳の輔佐を委嘱された。司馬懿は曹爽に遠慮して、漸時政治的實權から遠ざかる態度を示していたが、正始十年の正月、突如クーデターを起こした。そして曹爽を始めその一味を「大逆不道」のゆえをもつてことごとく誅戮した。そして年號を改めて嘉平とし、以後、司馬懿の権力はにわか増大し強固となつたのであつた。このとき何晏も、曹爽の一味として殺されたのである。

二

何晏の詩は、藝文類聚卷九十、鶴の部に、「何晏詩曰」として一首、初學記卷二七、萍の部に、やはり「何晏詩曰」として別の一首が引かれている。そのほかさらに、北堂書鈔卷一五〇、雲の部に、「何晏詩云」として二句を引く。それは馮惟訥、丁福保、ともに未收載のものである。現存する何晏の詩は、この三首に限られると判断される。藝文類聚に引くものは、また世説新語・規箴篇の注に引く名士傳にも掲げられている。藝文類聚に引くところによつて示すならば、次のごとき詩である。

雙鶴 翼を比ねて遊び 羣飛して 太清に戯る(たむ)

常に恐る 網羅に失はれ 憂禍 一旦に并(な)ざらんことを

豈に若かんや五湖に集(じふ)ひ 流に順(じゆん)ひて 浮萍を啜(す)はんには

逍遙して 志意を放(は)にせん 何爲(なす)れぞ 怵惕(しゆくたつ)して驚く

雙鶴比翼遊 羣飛戲太清

常恐失網羅 憂禍一旦并

豈若集五湖 順流啜浮萍

逍遙放志意 何爲怵惕驚

(藝文類聚卷九十、鶴、何晏詩曰)

世説新語・親箴篇注・名士傳に引くものは、「雙鶴」を「鴻鶴」に作り、「常恐失網羅」を「常畏大網羅」に作り、「順流」を「從流」に作り、「遙道放志意」を「永寧曠中懷」に作る。しかるとき、鍾嶸が詩品において、

平叔の『鴻鶴』の篇は、風規見ざる。

と評したのは、この詩についてであつたことがわかる。「風規」ということは、文選にも收める張衡の「東京賦」に、「卒に風規に補ひ無し」という句があり、李善は注して、「規は、諫なり」という。また、文選卷二一、應璩の「百一詩」題下の李善注に、晋の李充の翰林論のことは、

應休璉五言詩百數十篇、以風規治道、蓋有詩人之旨焉。

を引く。世のありかたに對して批判的な言辭をはくことを、「風規」といつたものと考えられる。詩品における何晏の評は、この一條にとどまるが、何晏のこの詩は、諷諫の意を示したところがよろしいとして、とくに鍾嶸は中品に置いたものである。

鍾嶸は、この詩のいかなるところに「風規」を見たのであろうか。實はこの詩をめぐつて一つの逸話が、世説新語の注に説かれている。ただしそれを理解するためには、いささか廻り道ではあるが、世説新語・規箴篇の本文から説かねばならない。

世説新語・規箴篇に、次のはなしをのせる。

何晏と鄧颺が、「位は三公にまでゆくだらうか」ということで、管輅に卦をたてさせた。卦がたつたとき、管輅は古義を引きながら、深くこれを戒しめた。鄧颺はいつた、「それはとしよりのいぐさだ。」何晏はいつた、「幾ヲ知ルハ其レ神力」とは、古人もむずかしいとしたことだ。『交ハリ疎ニシテ誠ヲ吐ク』とは、今人もむずかしいとすることだ。今そなたは、會つたばかりでこの二つのむずかしいことをやりのけた。『明德惟レ馨シ』というべきだ。詩經にもいつている、『中心之ヲ藏ス、何レノ日カ之を忘レン』と。

鄧颺は、何晏と共に、曹爽のブレインの一人として、後年司馬懿に誅された人物である。管輅は、京房易の流れをくむ方術者として著名であった。何晏の管輅に對することは、何晏の才識をいかに示している。「知幾其神乎」とは、周易・繫辭傳下のことば、「明德惟馨」は、書經・君陳のことば、「中心藏之、何日忘之」は、詩經・小雅・魚藻のことばである。「交疎吐誠」は、出處不明。何晏は古典のことばを縦横に使いこなして、才のひらめきを示している。

この本文につけられた注は、名士傳を引いて、次のことを敷衍する。

このとき曹爽が攝政の位置にあつたが、識者たちは、やがて危機がみまうのではないかと恐れていた。何晏は有カブレインといううわさが高い上に、魏と姻戚でもある。しかし内に憂いを抱くというものの、退こうとはしなかつた。五言詩を作つて、みずからの志をのべていう、「云云」(前掲の詩を引く。)思うに、管輅のことばにちなんで、おのきつつも、詩を賦つたのである。

右の名士傳を引く最後のことば「蓋因輅言、懼而賦詩」とは、劉孝標が附加するものであろう。名士傳にいう「識者慮有危機」とは、司馬懿の不満がつつて、やがてはクーデターがおこるかもしれないという豫感に、識者はおびえたことをいう。何晏みずからも、その豫感は抱きつつも、しかしあえてふみとどまり、自己の志をのべたのが、さきに掲げた五言詩である、と劉孝標は解釋したのである。世説新語の注者は、何晏のこの詩を、いわば「詠懷詩」であると理解したことになる。「詠懷詩」という詩題は、いうまでもなく阮籍から始まるのであるが、阮籍に先行する何晏の詩に、「詠懷詩」と同質のものを、注者は見ようとしたということになる。詩品がいう「平叔鴻鶴之篇、風規見矣」の評語も、世説の注者と同様の理解に立つて、この詩をうけとめたものであつたと想像される。

何晏の詩意は、太清にたわむれ遊ぶ比翼の「雙鶴」(鴻鶴)も、たえず、いつの日かはあみにとらえられ、ある日突如としてわざわいにあうのではないかと恐れるのだ。それならばいつそのこと、太清などに遊ばずに、下界の五湖につどい、流れの間に浮き草を食ひ、逍遙して志をほしのままにした方がよいではないか、(とわに安らかにして心をのび

のびとさせた方がよいではないか)、なぜにびくびくし、はつと驚く生活を續けるのだ、とのべたものである。

もしこの詩を、世説注にいうところに沿つて理解するならば、何晏らが「不知位至三公不」と問うたのに對し、管輅が、「古義」を引いてさような不遜な考えを持つことを深く戒しめたのにちなんで、懼れて詩を賦したというのであるから、「太清」に「比翼」して遊ぶ自分たちの生活を續けるよりも、下界の逍遙の生活の方がよいことを、何晏自身、管輅の言を聞いて瞬間にさとつたということにならう。しかしながら實際は、何晏は身をそうした方向において處置することなく、相變らず曹爽のブレンとして辣腕を發揮し、ついに殺されたのである。このとき何晏は、自己の本心をいつわつて、逆の發言をし、管輅にあわせたのだ、と世説の注者は理解したものとみえる。

その理解は、一説としては成立するであらう。しかしながらまた思う、何晏は、權力の座にありながらも常日ごろ、右すべきか左すべきかにはたえず悩むところがあり、その心のゆらめきが、この詩を作る瞬間、みずからの姿勢とは逆の發言となつてあらわれたのではなかつたか。いうなればその詩は、矛盾したゆたう自己のかくされた一面を示したもので、別いうならば、かくされた自己の深層の心のたゆたいをうたう詩として發言したのではなかつたか。世説新語の夙惠篇には、魏の武帝が七歳の何晏を愛しておのれの子にしようとしたとき、何晏は地に方形をかいて自分をその中におき、「何氏の廬なり」と答えて、ついに魏の武帝にあきらめさせ、家にもどつたという。いかにも幼少にしてひらめいた才子にふさわしいはなしがらではある。「才の秀れたるを以て名を知られ、老莊の言を好む」とは、三國志の何晏の傳にいうところであり、「晏は少くして異才有り、善く易・老を談ず」とは、世説新語・文學篇注に引く魏氏春秋の言であるが、若くしてニヒルな論理のおもしろさを心得た何晏ならば、夙惠篇に説かれるようなはなしも肯定できる。そしてそのようなニヒルな論理をさらに發言として示したものが、すなわちこの五言詩ではなかつたかとわたくしは考へる。

玉臺新詠卷二に、曹丕の「於清河見輓船士新婚與妻別」と題して掲げる詩に「願爲雙黃鶴、比翼戲清池」とある。この詩は、藝文類聚卷二九、別上には、徐幹(一七〇—二二七)の「爲輓船士與新娶妻別詩曰」として引き、「願爲雙黃鶴、悲

鳴戲清池」に作る。何晏の「雙鶴（鴻鶴）比翼遊、羣飛戲太清」は、この曹丕、あるいは徐幹の詩をふまえるであろう。徐幹はいうまでもなく、建安七子の一人である。「太清」ということばは、いうまでもなく莊子・天運や、淮南子・精神訓などに見られる道家の言であるが、詩語として用いられたものとしては、仲長統（一八〇—二三〇）の詩として後漢書の仲長統傳に引くものに、「翔翺太清、縱意容冶」とある。仲長統は、建安詩人と時代を共にしつつ、建安詩人のグループには入らなかつた人である。仲長統にいう「太清」も、なお道家臭が強いが、何晏はこのとき、仲長統の詩を思いうかべていたのかも知れないと思う。ただし何晏のいう「太清」は、道家臭をふくませつつも、直接には曹氏の宮廷をさしているであろう。「比翼」して遊ぶ「雙鶴」ないしは「鴻鶴」は、公主を妻として宮廷に生活するみずからの比喩であると考へる。

何晏は、建安詩人、ないしはその周邊の詩人の用語や發想を借りつつも、詩そのものは、抑壓され鬱積し屈折した心をうたう。それは、人に背をむけるつぶやきの詩であり、閉塞の心を訴える詩である。あるいはさらにいうならば、潜在する心理、深層の心中をつげる詩である。そのような内にこもつた詩は、従前の建安詩の時代には、ほとんど見られないものであつた。大體において建安詩には、ニヒルな發言が少いのである。

何晏より後の詩人である阮籍の「詠懷詩」にいう、

寧ろ燕雀と翔らんも 黃鶴に隨ひて飛ばざらん 寧與燕雀翔 不隨黃鶴飛

黃鶴は四海に遊ぶも 中路將た安くにか歸すべき 黃鶴遊四海 中路將安歸

またいう、

殷ぎ憂は志をして結はれしむ 忱惕 常に驚くが若し 殷憂令志結 忱惕常若驚

逍遙 未だ晏を終へざるに 朱陽 忽ち西に傾く 逍遙未終晏 朱明忽西傾

△其八▽にいうところは、その心、何晏の詩意と同じである。△其二四▽の「忱惕常若驚」が、何晏の詩「何爲忱惕

驚」を、たしかに意識しているのではないか。何晏の詩において「逍遙」と「怵惕」とを對比させているが、阮籍においても「怵惕」のあとに「逍遙」をいう。また阮籍はいう、

天網は 四野に彌り 六翮 掩はれて舒びず 天網彌四野 六翮掩不舒

波に随ふ 紛綸の客は 汎汎として鳧鷖の若し 隨波紛綸客 汎汎若鳧鷖（其四一）
この發言もまた、何晏の詩を意識しつつ、さらに展開させるものではないかと思う。

何晏の詩の影響は、嵇康にもなお見られる。「贈秀才入軍」と題する十九首の作の（其十九）にいう、
逍遙して 太清に遊び 手を携へて 相追隨せん 逍遙遊太清 携手相追隨

この發言は、何晏の詩を逆に利用して、すなおに、道家的世界への遊弋を説くものである。嵇康はまた、「答二郭」と題する三首の作の（其二）においていう、

坎壈として 世の教へに趣けば 常に 網羅に嬰らんことを恐る 坎壈趣世教 常恐嬰網羅

「嬰網羅」という發想は、何晏の「失網羅」、あるいは「大網羅」から得ているのかもしれない。「坎壈」とは、楚辭・九辯「坎壈兮貧士」、劉向、九歎「志坎壈而不違」などに先行例がある語で、困窮するさまを示す擬態語である。

三

何晏のもう一つの作品というのは、初學記卷二七、萍に、「何晏詩曰」として引かれる次の詩である。

轉蓬 其の根を去り 流れ飄ひ 風に從ひて移る 轉蓬去其根 流飄從風移

芒芒たり 四海の涂 悠悠 焉ぞ彌るべけんや 芒芒四海涂 悠悠焉可彌

願はくは 浮萍の草と爲り 身を託して 清池に寄せん 願爲浮萍草 託身寄清池

且らく以て 今日を樂しまん 其の後は 知る所に非ず 且以樂今日 其後非所知

この詩の一部を引く藝文類聚卷八二、萍の部の「何晏詩曰」は、「願爲綠蘋草、託身寄清池」に作る。「轉蓬」という

ことばは、「飛蓬」「孤蓬」などのことばとともに、古詩、および建安詩において好んで使用されたもので、その詳細についてはすでに拙著「漢魏詩の研究」(三八八ページ)において述べたが、何晏のこの詩の發想にきわめて類似するものとしては、左に掲げる「古詩」や、曹植の「雜詩」が求められる。

轉蓬 本根を離れ 飄たなほひては長風を畏る 轉蓬離本根 飄之畏長風

(藝文類聚卷八二、蓬に、「古詩」として引く)

轉蓬 本根を離れ 飄飄として 長風に隨ふ 轉蓬離本根 飄飄隨長風

(文選卷二九、曹植「雜詩」六首八其二)。藝文類聚卷八二、蓬においても、「曹植詩曰」として、右に掲げた「古詩」のほか、に、この句を引く。)

身のはかなさを浮き草にたとえる例は、これまた「古詩」や建安詩にしばしば見るが、何晏の詩に近い例としては、玉臺新詠卷二に載せる曹植の「浮萍篇」の次の句が求められる。

浮萍 清水に寄せ 風に隨ひて 東西に流る 浮萍寄清水 隨風東西流

(玉臺新詠卷二、曹植、「浮萍篇」。藝文類聚卷四一、論樂においては、曹植の「蒲生行」と題し、「清水」を「綠水」に作る。)

何晏の詩は、これらの「古詩」や曹植の詩の用語、ないしは發想に借りたものであると考えるが、轉蓬になるよりは浮萍になりたいという發言は、新しいであろう。そしてまた、その結びの二句が、知識人の發言としてはまことに大膽に現實的であり、かつなげやりである。

人のいのちははかないものであるから、樂しめるときにこそ楽しんでおいた方がよいという感情は、「古詩」「古歌」においてはしばしばのべられ、建安詩人のうちでは、曹丕の詩歌に示される。そうしたことの詳細は、すでに拙著において論じたので、いまここに重ねてふれることを省く。何晏のこの詩は、「古詩」「古歌」においてしばしばとりあげられた感情を繼承するものではあるが、しかしそれにしても、「且以樂今日、其後非所知」の、あとのことは知つたことでは

ない、というろこつなあけすけなことは、何晏の詩において始めてあらわれたものである。その發言の裏には、追いつめられた者の焦燥と悲哀をすら感ずる。かつて漢の武帝の子の廣陵厲王胥は、その罪狀調査のための使者が宣帝によつて派遣されたとき、みずからの最後を察知して太子・子女・愛妾を集め、この世の別れの宴を催して訣別の「歌」をうたつたが、その結びにおいて、「出入に^{たのしみ} 驚^{たのしみ} 無かりき^{たのしみ} 樂しみを爲すこと^{すみか} 亟^{すみか} にせん」（出入無^{たのしみ} 驚爲樂亟）とのべたこと、漢書・武五子・廣陵厲王胥傳にしろされてゐる。何晏のこの詩には、廣陵厲王胥の「歌」にも似た、暗いものを感じさせる。その暗さは、正始という時代の陰鬱さとかやうものがある。「古詩」「古歌」に示されたデカダンスの發言は、現世享樂の氣持ちをあけすけに、開放的にいつたまでのことで、そこにはからりとした遊びがあつたが、何晏の發言はそうではない。何晏の詩には、絶望の暗さがただよう。

陶淵明の「遊斜月」と題する詩において、

且^{しほち}くは 今朝の樂しみを極めん 明日は求むる所に非ず 且極今朝樂 明日非所求

という。そのことばは、何晏のこの詩を意識するであらう。また、阮籍の「詠懷詩」八其十六Ⅴにいう、

蓬池の上を徘徊し^{ほたり} 還顧^{かへりかへ}りて 大梁を望む 徘徊蓬池上 還顧望大梁

緑水は 洪波を揚げ 曠野は莽として茫茫たり 緑水揚洪波 曠野莽茫茫

は、イメージにおいて、何晏のこの詩の世界を描いたのではなからうか。藝文類聚に引く何晏のこの詩は「浮萍草」を「綠蘋草」に作つていた。

何晏の詩の第三は、北堂書鈔卷一五〇、雲の部に、「何晏詩云」として引く次の二句である。

浮雲 皎日を翳^{かす}らせ 微風 輕塵を起こす 浮雲翳皎日 微風起輕塵

明の陳禹謨補本は、右の形に作るが、清の孔廣陶校注本は、「浮雲翳白日、微風輕塵起」に改める。古文苑卷八に、孔融（一五三—二〇八）の「臨終詩」と題して掲げる中に、

讒邪 公正を害ひ 浮雲 白日を翳らす 讒邪害公正 浮雲翳白日

とある。孔本北堂書鈔卷一五八、穴の部は、この「臨終詩」を「孔融折楊柳行曰」として掲げる。一方また、文選卷二九、古詩十九首八其一「浮雲蔽白日」の李善注は、「古楊柳行曰」として「讒邪害公正、浮雲翳白日」の二句を示す。李善がいう「古楊柳行」は、「古折楊柳行」の「折」の字を脱しているであろう。それはともあれ、何晏の二句の遺句は、孔融、あるいは「古歌」を轉用して、やはりなにがしの、政治社會に對する發言を、比喩的に、陰微にこころみようとしたものであらう。孔融はまた、建安詩人の一人である。

鍾嶸は詩品の序文において、「斯皆五言之警策者也」として掲げる作品例のなかに、「平叔の『衣單』』というのをあげているが、「衣單」がどういう作品であつたかは、こんにちではまつたくわからない。

何晏の詩の残るものは少ないが、その詩には、常識に背をむけるつぶやきがある。かれにおいて詩は、閉塞の心の窓であつた。思想家としては、老莊の哲學に深い關心と造詣とを持つていたかれにして、その詩には老莊の哲學をなまの形では説かない。低きにつくをよしとしたり、むしろ浮き草にならうという考え方は、老莊的ではあるが、しかし老莊的世界に悠然と逍遙するという態度は、その詩にはない。かれの詩は、鬱積し、屈折する心情を語る。その眼は、人間の誠實さに對する希望を喪失しているといつてもよい。何晏より前の時代の詩人、すなちち建安詩人たちの詩は、人間の誠實さに對する希望が横溢していた。政治的立場においては不遇であり、たえざる不平不満があつたにちがいない曹植の詩にして、やはり特にそうである。しかし何晏の詩には、理想への希望がない。それは何晏自身の運命を象徴させるかのごとく、救いがなく暗い。やがては魏王朝自體がその命運として持つところの暗さ、それが何晏の詩にはあるということが可能である。そしてその詩は、詠懷的うたいかたをとり、阮籍の「詠懷詩」の明確な先蹤になる。應璩の「百一詩」と阮籍の「詠懷詩」とは、人間の生き方の問題を詩の題材にとりあげるという點において共通するものはあつても、その詩人的發想は直接にはつらならないが、何晏の詩と、阮籍の「詠懷詩」とは、その傾向に共通するものがあり、より直接につら

なる。何晏の詩からして、建安詩とは異なるところの沈鬱なかけを持つた正始の詩が、その第一歩をふみ出したというところが可能である。

註1 魯迅「魏晉風度及文章興樂及酒之關係」(而已集)

註2 拙著「漢魏詩の研究」の中の「デカダンスの感情について」において、詳述をした。建安の文人の作品においては曹丕の樂府作品の一部において、デカダンスの感情が吐露される以外、そうした感情をろこつに示すものは見られない。そうしたところに、建安詩の健康さの一面を見ることができるといえる。

〔補〕 この稿をしるしたあと、たまたま興膳宏氏の「嵇康の飛翔」(中國文學報第十六冊)を読んだところ、興膳氏がすでに何晏の詩と嵇康の「贈秀才入軍十九首」(其十九)との類似を説いていることを知った。同氏の發見に敬意を表したい。

(本學助教授)